

2年学年だより

大淀中学校 2年 平成29年11月8日 第29号

！(^_^)！立場が人を育てる

能力や適性のある人間が、相応の「立場」につくことは、望ましいことです。

一方で、「立場」が人間を変える、ということもあるように思います。最初は頼り無かったリーダーが日に日にリーダーらしく、部活をまとめられなかつた部長がどんどん部長らしくなっていくことがあるはずです。

思わず与えられた「立場」や普段はつかない「役割」が、自分自身を大きく変えるきっかけになるかもしれません。「自分には向いていない立場だな」と思いつつ、「それでもやってみようかな」という気持ちが少しでもあれば、是非挑戦してみてほしいです。そのような機会は学校生活の中にたくさんあるはずです。

〔先週の学年集会時 井上風次郎先生のお話より〕

☆人、人、人 すべては人の質である

少し長くなりますが、以下の文章を読んでみてください。

昭和20年8月7日の早朝、キーンという飛行機の急降下音に続いて、ものすごい爆発音が起り、私はハッと目をさまされ、はね起きた。さいしょはなんだかわからなかつたが、ソ連軍が爆撃を始めていたのである。

そのころ、私が仕事の関係で住んでいた東満州の国境の町、綏陽県綏陽街には 109 師団の司令部があつたが、主力はすでに移動してしまつた。残留部隊が一個大隊ほど残つてゐたが、ソ連の参戦を知らされたときには、一人も残つておらず、ぜんぶが出動と称して主力のいる後方へ逃げだしてしまつた。

町には、その日の朝召集された在郷軍人が、木銃を持って警備に立たされており、憲兵も警察も10時ごろには一人もいなくなつてゐた。

私はソ連軍がはいつて来るまで残つてゐたが、鉄道線路ぞいの道路を、ゴウゴウと地ひびきをたてて進んでくる大きな戦車の群れを見たときに、これはダメだと直感して、おそまきながら逃げだすことになった。

ソ連軍と前後しながら、国境から牡丹江、それか

ら哈爾濱を経て新京(現在の長春)、奉天へと脱出してくるあいだに、さまざまな出来事を体験した。そのなかでもいまでもいちばん強く印象に残つているのは、関東軍が在留邦人を見捨てていち早く後退してしまつたのちに起つた、各種の悲劇をじつさいにこの目で見たことである。

『人間の条件』(五味川純平著)という小説を読んだが、あれに書いてあるよりも、もっとひどい場面に何回もめぐりあつた。そしてそのたびに、極限に追い込まれた人間が露呈する、けだものにも劣つた悲しい人間の本性を見て、すさまじい生への執着に目を見張つたものである。

しかし、そのようなときにおいても、教養のためかそれとも修養の結果か、あるいはまた性格的なもののかわからぬけれど、自分の欲望を抑えることのできるものもいたし、なかには自分の犠牲において他のために役立とうとするものもたしかにいた。そういうときでしか知ることのできない、赤裸々な人間の姿を見て、学歴や身分に関係なく、人間の質に差のあることを発見し、それが以後の私の人生観を変えることになったのである。

中国大陸で敗戦を迎へ、10か月の抑留生活を経て、翌年5月に日本に引き上げた人物の文章です。この文章が記された書物とは小学生の時に出会いましたが、本腰を入れて読んだのは、大学生の時でした。

それからずっと「人間の質」ということばが頭に残つています。同じ人物が他の著作の中で、「人、人、人 すべては人の質である」とも書かれています。そのことばもずっと頭に残つています。すべてが人によって行われるのなら、その立場に立つ人の質によって、大きな差が生じてしまう・・・ならば・・・。